

前近代を中心とした子どもの衣服と性差に関する調査・研究
— 絵画及び染織資料からみた服装形態とその実態をめぐって —

Study on Children's Clothing and Gender Difference with Emphasis on Pre-modern Japan:
Form of Clothing as Seen in Paintings and Textiles

土屋 貴裕*¹⁺, 古川 攝一*²⁺, 伊永 陽子⁺, 菊池 理予*³⁺

Takahiro Tsuchiya*¹⁺, Shoichi Furukawa*²⁺, Yoko Korenaga⁺, and Riyo Kikuchi*³⁺

*1 東京文化財研究所 企画情報部 東京都台東区上野公園 13-43

Department of Research Programming, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-Ku, Tokyo, Japan

*2 大和文華館

The Museum Yamato Bunkakan

*3 東京文化財研究所 無形文化遺産部

Department of Intangible Cultural Heritage, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

⁺服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: In the present study, focus is placed on children depicted in paintings of Japan dating to the ancient and medieval periods. The aim of the study is to clarify images concerning children's clothing and its significance as well as its background from the point of view of cultural history by sorting out and studying the form of their clothing (technique for making textiles, their materials, color, shape, choice of clothes and other matters. In particular, through a comparison of children's clothing as seen in such genres of paintings as hand scrolls and extant textile objects for children after the modern period, of which there is an abundance, study is made to see whether there was some type of corresponding relation between children's clothing and gender difference before the modern period.

In fiscal year 2010, which is the first year of this study, emphasis was placed on fundamental research, looking at images of children found in paintings and examining textiles for children after the modern period. Hand scrolls are full of images of children, and further study is required concerning how far it is possible to learn about gender differences from these images. With regard to research of textiles, information concerning textile objects owned by various organizations was collected, beginning with information provided in official publications, and some of the objects were examined.

はじめに

本研究は日本古代・中世絵画に表わされた子どもの姿に着目し、その服装形態(衣服の技法、材料、

*1) tsuchiya@tobunken.go.jp

色、形状、着装、着衣／裸形等)の整理・検討を通じて、子どもの衣服をめぐる表象とその文化史的意義や背景を明らかにすることを目的とする。とりわけ、絵巻・説話画・仏画等の絵画資料と、現存遺品に恵まれる近世以降の子どもの染織資料との比較検討を通じて、前近代の子どもの服装と性差とはいかなる対応関係にあったのか、あるいはなかったのかということを復元的に考察する。あわせて、有職故実書や日記類、考証書での子どもの衣服に関する言及を抜き出し、絵画資料、染織資料との比較対照を試みる。

以上の分析によって導かれる、表象された「衣服をまとう子ども」をめぐる実証的、歴史的考察から、服飾の果たした社会史的・文化史的役割や機能の一端を明らかにすることを最終的な目標として設定している。

本年度の研究推進状況

本研究は子どもの服飾を主たる研究対象として設定しているが、今日、日本服飾史の中でもこの分野の研究が進んでいるとは言い難い状況にある。日本服飾史の通史の中でも簡単に触れられる程度であり、この他、風俗史の観点からのアプローチが散見される程度である[1]。

よって研究開始年度である本年度は、研究の前提となる各種資料の収集・調査といった基礎研究を精力的に推進した。研究の推進、成果の共有、進捗具合の確認に関しては、研究開始月からほぼ毎月、研究打ち合わせ、研究会を開催するとともに(文化ファッション研究機構本部、東京文化財研究所、大和文華館)、メンバーの参加する作品調査、展覧会見学にあわせて、活発な意見交換を行なった。ただし、本年度は、研究開始月から年度末までが半年以下という限られた期間内であること、予算の縮小等の理由により、申請時の研究計画よりは規模を縮小せざるをえない状況にあった。

さて、本研究はおおむね以下の三点を大きな柱として推進した。

- (1) 古代・中世絵画作品の中の子どもの図像の抽出
- (2) 近世以降の子どもの染織品の作品調査
- (3) 文献資料における子どもの服飾に関する記述の抜き出し

以下、それぞれの具体的な研究の方法とその成果、今後の課題等について述べる。

(1) 古代・中世絵画作品の中の子どもの図像の抽出

前近代の子どもの服飾を研究対象とする本研究にとって最も大きな課題となるのは、現存遺品に恵まれない、古代・中世の子どもの服飾をどのように復元的にとらえるのかという点にある。そこで着目すべきは、多くの子どもの姿を描く絵画作品である。従来の染織史、服飾史、有職研究においても、絵画資料は度々用いられてきた。だがそれは、成人の衣服を対象とするものが圧倒的に多く、また、数ある絵画作品の中から断片的に図像を選択していくという方法がとられてきた。

本研究ではまず、美術作品の中の子どもの関する先行研究を参照しつつ[2][3][4]、可能な限り悉皆的に、古代・中世の絵画作品の中から子どもの図像を抽出・整理し、それぞれの子どもの服装形態、男女の別、色、形状、着装といった情報を記述した上で、分析の基礎資料としていく方針をとった。本年度は絵巻、および仏画を対象に、こども図像の抽出作業を進めた。

1) 絵巻の中の子ども

絵巻作品に描かれた子どもを対象とした先行研究に、黒田日出男氏の研究がある[5]。本研究は黒田

氏の議論を承けながらも、まずは絵巻作品の中から子どもの図像を悉皆的に抽出し、その上で議論を展開する基本方針を立てた。子どもの図像を抜き出すにあたっては、公刊図書である『新修日本絵巻物全集』[6]、『日本絵巻大成』[7]等がまずは調査の起点となる。

本年度に関しては『日本絵巻大成』の普及版たる『日本の絵巻』[8]から、院政期から鎌倉期にかけての20点の作品について調査を進め、右の17作品から子どもの図像の抽出を行なった。

【子どもの図像を確認した絵巻作品】

「源氏物語絵」	「寝覚物語絵」	「伴大納言絵」
「吉備大臣入唐絵」	「信貴山縁起絵」	「鳥獣戯画」
「餓鬼草紙」	「病草紙」	「年中行事絵」
「紫式部日記絵」	「葉月物語絵」	「粉河寺縁起絵」
「絵師草紙」	「長谷雄草紙」	「なよ竹物語絵」
「直幹申文絵」	「石山寺縁起絵」	

この作業は、本研究の根幹を成すものとして研究開始時から進めたが、本年度精査を終え、悉皆的に抽出をかけた対象(図像数)だけでも数百点に及ぶ。膨大な数のデータをどのように整理・解析していくかに関しては、作品の制作時期と描かれた服飾の時代的変遷、物語との対応

関係等を視野に入れつつ、次年度以降さらなる検討を深めたい。また、抽出された子どもの図像の大半は添景として描かれた庶民階級であり、それゆえに子どもの服飾の「実態」に比較的忠実な描写と解釈することも可能である。後述する染織品資料の分析とあわせ、美術史研究の手法と染織史研究の方法を交差させた独自の研究手法の構築を目指したい。

2) 仏画の中の子ども

仏画と括りうる絵画作品の中には多様な主題が描かれている。仏画に描かれた子どもについて、数ある現存作例中にいかなるものがあるのかを抽出し、分類を試みた結果が以下の通りである。

- ①**仏教説話画** 経典や社寺の縁起を絵画化した作例に、子どもを描くものが多く認められる。経典絵としては「華嚴五十五所絵」(平安時代。東大寺・根津美術館他蔵)が、文殊菩薩の指南によって善財童子が善知識を訪れる、『華嚴経』「入法界品」に説かれる各場面が視覚化されている。社寺縁起絵では、地蔵菩薩の奇蹟を描いた掛幅説話画「矢田地蔵縁起絵」(鎌倉時代。金剛山寺蔵)が、地蔵によって蘇生した子どもの姿を描く。仏伝、聖徳太子、親鸞ら祖師・高僧伝絵の中にも子どもの姿が認められる。とりわけ、これらの作例は具体的な年齢が分かり、注意される。
- ②**図像** 子どもの姿をした「ほとけ」が多くの仏画の中に認められる。阿弥陀来迎図に描かれた持幡童子、童子形の文殊菩薩、子供を抱く訶梨帝母、童子経曼荼羅、十五鬼神図巻などである。
- ③**垂迹画** 様々な神の姿を視覚化した垂迹画の中にも童子の姿が認められる。とりわけ「熊野垂迹曼荼羅」は童形神が多い。「荼吉尼天曼荼羅」や「子守明神」にも描かれる。
- ④**肖像画** 聖徳太子、弘法大師らの肖像画には童子形で描かれる作例が多い。上掲の高僧伝絵との関連含め、さらなる検討を進めたい。

以上の絵巻、および仏画からの子どもの図像の抜き出しにあたっては、まずは膨大な作品群をどれだけ網羅できるかという点が第一の課題となる。とりわけ仏画に関しては、各種刊行物に分散して写真が掲載されているなか、対象をどこまで絞るのかを十分吟味する必要がある。また第二に、図像のインデックス化に伴う掲載項目、具体的なデータ処理の方法に関しても、今後さらにブラッシュアップする余地がある。ただし、蓄積図像の共有化とその公開に関しては、現在の研究費執行の制約上、不可能と言わざるを得ないことは惜まれる。

数度にわたって開催した共同研究員参加の検討会では、上記の問題の他、最終的な分析にあたっての基本方針等について検討した。その中でも、従来の研究では疎かであった、作品の制作年代に十分配慮することの重要性をメンバーが再確認した。子どもの図像をただ抜き出すのではなく、成立年代順に並べることで、子どもの服飾の歴史的展開をも見通せるよう配慮し、また、それぞれの作品成立の個別具体的な制作の背景、典拠となる物語や説話、仏典や儀軌などを踏まえた上での、子どもの衣服を検討・分析することが重要となるとの方向性を見出した。

(2) 近世以降の子どもの染織品の作品調査

先述のように、現存する染織品の多くは近世以降のものである。また、本研究が考察の対象とする近世以降の子どもの染織品に関しては主だった先行研究もないため、公刊された図書、展覧会図録などから該当作品の把握を行う必要がある。本年度においては、それらの調査を進めつつ、共立女子大学所蔵の[9]、右の6領について調査を行なった(このうち、「薄黄地水仙雪輪模様一つ身」は前田家伝来)。

この6領のうち、3領が一つ身、残る3領が四つ身である。一つ身とは本裁(大人物)、中裁(四つ身)に対し、三つ身と共に小裁に属し、嬰兒から1,2歳位までが着用した長着であり、後ろ身頃を並幅いっ

ぱいにとることから、背縫いが見られないという特徴を持つ。一方、四つ身は身長4倍で反物を裁つことから付いた名であり、5~12歳位が着用した。一つ身とは異なり、背縫いを持つ。

以上の作例の詳細な調査の結果、この6領に用いられる技法は、成人の小袖に用いられるものと同様であり、子どもの染織品特有の技法は見られないことが明らかとなった。例えば、「茶染分地牡丹冊子模様一つ身」は、友禅染に部分的に細めの撚金糸や平金糸による刺繍が加えられているが、これは明治時代の成人の小袖にも特徴的に用いられる技法である。

本研究の主題である性差の問題については、「背守り」の付された作例が2領見られた。「背守り」は、背縫いを持たない背が一幅のもの、すなわち一つ身のみ施され、背中心から男児は左へ、女児は右へ、斜めに針目を渡すとされている¹⁾。「薄黄地水仙雪輪模様一つ身」(江戸時代中期)は、背守りが左へ施されていることから男児が着用したと考えられ、「茶染分地牡丹冊子模様一つ身」(明治時代)は、背守りが右方向へ施されており、女児が着用したものと考えられる。ただし、残る一つ身である「鶉色地光琳菊模様一つ身」に「背守り」は確認できなかった。

今回調査した6領に関して、その技法、様式、意匠、色相等から直ちに着用者の性別を判断することは困難であった。「背守り」が縫い付けられた、すなわち男児、女児の別が明らかと思われる2領に関して、これら技法その他の情報から着用者の性別を判断することは難しい。また、仕立てに関しても、今日の成人のきもの仕立てが男女によって異なるのに対し、子どもの衣服においてはそれが確認できない。子どもの染織品に関しては、生地や仕立て、加飾技法から男女を分ける意識が希薄であったとも推察される。男児、女児の着用者の区別については、現段階ではこの「背守り」、または作品の伝来情報に拠ら

【共立女子大学所蔵作品調査一覧】

*丈・衿・襖の単位はcm

名称	丈(襖)	衿(襖)	時代
「薄黄地水仙雪輪模様一つ身」	88.4	37.4(0.1)	江戸時代中期
「鶉色地光琳菊模様一つ身」	97.3	47.5	江戸時代中期
「白地松竹梅模様四つ身」	73.3(2.2)	32.4(0.6)	江戸時代後期
「茶染分地牡丹冊子模様一つ身」	96.7(3.5)	39.5	明治時代
「薄紫染分地菊牡丹扇地紙模様四つ身」	107.5(1.4)	52.0(0.9)	明治時代
「藍染分地菊竹模様四つ身」	116.1(0.9)	56.5(0.9)	明治時代

ざるを得ない。

しかしながら、今後、着用者の明らかな作品や「背守り」の施された作品を、可能な限り網羅的に調査・整理することで、その特徴がより明確なものになると期待される。また、着用者の階層については、その作品の種別や時代様式を踏まえた検討をより深めていく必要があるだろう。来年度以降、上記の点に注意しながら、調査対象作例は本研究課題と密に関わる、使用者の性別が明らかなものを優先する。ただし、本研究の進展により、染織品の諸情報から着用したであろう性別を特定することもあるいは可能とも推察されるため、可能な限り多くの作品調査を行うこととしたい。また、同時に子どもの染織品に関わる研究史の再構築のため、諸文献を収集し、該当作品群の把握に積極的に努めたい。

(3) 文献資料における子どもの服飾に関する記述の抜き出し

本研究では、絵画、染織品といった実際のモノだけではなく、有職故実書、日記等記録類、考証書等の文献資料からも、子どもと服飾の関係について分析を進める。特に今年度は、従来の研究でも比較的手薄な中世の有職故実書にまずは着目した。具体的には、もっとも主要な中世の装束書を収めた文献の一つとしてあげられる『群書類従』6、7〔装束部〕における子どもの服飾の記述について調査した。当該書には20点の装束書が納められているが、そのうち右の15点(平安末から室町期)に子どもの服飾に関する言及が見られた。

これらの装束書は、当然のことながら目的や成立時期、記述の形式、また、子どもを指し示す表現も多様で、対象の階級や年齢に関しては十分な配慮が必要となることは言うまでもない。ただ、装束ごとにみていくと、下着類や表袴など男女が共通して着用する衣服はあるが、服装における男女の性差は明確にあることが推察される。

ただし、本年度調査を進めた『群書類従』所収の装束書は公家男子を中心とした上層階級の服飾の記述が主であり、今後は女子、および武家などの服飾についての文献調査を推進する必要がある。上記装束書の具体的な検討は次年度以降さらに深めていきたい。

これらと並行して、中世の日記類における子どもの服飾に関する言及を抜き出す作業を進めた。ただし、中世の日記類は膨大にあり、今年度は右に掲げた、活字化された鎌倉・南北朝期の天皇・公家日記の調査を進めた(対象史料は増補史料大成、史料纂集所収)。

【子どもの服飾に言及する『群書類従』掲載書】

書名	著者	成立
『満佐須計装束抄』	源雅亮	平安末期
『飾抄』	中院通方	鎌倉前期
『物具装束鈔』	中山忠定	鎌倉前期
『助無智秘抄』	不詳	鎌倉前期か
『雁衣鈔』	不詳	鎌倉中期か
『布衣記』	齋藤助成	永仁三年(1295)
『後照念院殿装束抄』	鷹司冬平	鎌倉後期
『三条家装束抄』	不詳	鎌倉期
『連阿口伝抄』	高倉永綱	貞治五年(1366)
『連阿不足口伝抄』	高倉永綱	貞治五年(1366)
『法装束抄』	高倉永行	応永三年(1396)
『装束雑事抄』	高倉永行	応永六年(1399)
『深窓秘抄』	山科頭言か	応仁二年(1468)頃
『女官飾鈔』	一条兼良	室町中期
『装束抄』	三条西実隆	室町中期

【鎌倉・南北朝期日記類の分析】

書名	著者
『後深草天皇日記』	後深草天皇(1243~1304)
『伏見天皇日記』	伏見天皇(1265~1317)
『花園天皇日記』	花園天皇(1297~1348)
『勘仲記』	広橋兼仲(1244~1308)
『公衡公記』	西園寺公衡(1279~1315)
『園太暦』	洞院公賢(1311~1360)
『師守記』	中原師守(1312~1378)

その結果、これらの文献資料から抜き出せる子どもの服飾に関する記述は、主に立太子等の儀礼に関わるものが大半であった。また、その記述もほとんどが同様の服飾形態を示し、同時代における「有職」の実践がここに集約されていると言うことも可能だろう。今後、さらに対象を広げることで、天皇家以外の記述を抽出することを目指したい。あわせて、近世以降の考証書等の検討は次年度以降の課題とする。

おわりに

先にも述べたように、本年度は研究開始にあたっての基礎作業を積み重ねていくことを第一の目標とした。研究の全体的な方向性は見えてきたと言ってよい。ただし、それぞれが膨大なデータを取り扱うため、それらを整理し、効果的に研究の素材としていくべく、さらなる工夫が求められよう。

あわせて、本年度調査・分析を進める中でより問題意識を深めたのは、それぞれの資料から明らかとなる子どもの服飾形態の要素が異なるということである。絵画作品を対象とした考察では、染織作品からは分からない着装・着衣等の様相が、また逆に染織作品を対象とした考察では、絵画作品からは分からない実際の技法・生地が明らかとなる。加えて、文献の研究は、着装者の階層や、その服飾がいかなる時や場で用いられたのかを補足することができるが、その実態をどこまで反映しているのかについては十分な史料批判を踏まえる必要がある。これら対象とする資料の差異を認識しつつ、三つの領域の成果を有機的に連動させ、総合的な視点から子どもの服飾を捉えていくことが次年度以降の一つの目標として設定される。

とりわけ、本年度調査した染織作品においては、施された技法、様式、意匠、色相、仕立てなどから着装者の性別を俄に判別することは困難であると指摘した。むろん、さらに多くの染織品の調査を実行する必要はあるが、このことは前近代の一部の子ども服飾は男女を明確に分けようとする意識が希薄であった可能性を示唆するものであり、絵画資料に描かれた子どもの図像、および文献に記された子どもの服飾に関する言及との比較対照をさらに推進することで、大きな成果へとつなげてゆきたい。

文献

1. 江馬務:「幼児服装史」『江馬務著作集』第3巻,中央公論社(1976.6)
2. 奈良国立博物館(編):「こどもを守るほとけたち」展図録(1999.8)
3. 彦根博物館(編):「美術の中の童子」展図録(2000.10)
4. 東京国立博物館(編):「美術の中のこどもたち」展図録(2001.10)
5. 黒田日出男:『「絵巻」子どもの登場 中世社会の子ども像』,河出書房新社(1989.7)
6. 『新修日本絵巻物全集』(正・別巻)全32巻,角川書店(1975.8-1981.2)
7. 小松茂美(編):『日本絵巻大成』(正・続・続々)全55巻,中央公論社(1977.2-1995.8)
8. 小松茂美(編):『日本の絵巻』全20巻(1987.4-1988.11)
9. 泉屋博古館分館(編):「共立女子学園コレクション 華麗なる装いの世界」展図録(2005.4)

ⁱ 共立女子職業学校編輯『女子技芸講習録 和服裁縫』(1927年)のなかの「背守の縫ひ方」には、「女兒は大針を背に七針、右の方へ六糎(約一寸五分)開いて、斜に五針を出し針目の間を五針(約一分五厘)許りとします、男兒は女兒のと反対に小針ばかりを表に出します。又左の方へ斜に開いて縫ふ慣例でもあります」とある。少なくとも昭和初期には、この「背守り」が男女の衣服を区分けする役割を担っていたことがうかがえる。ただこの「慣例」が果たしていつ頃まで遡りうるものなのか、また地域差が存するのかなどに関しては今後の課題としたい。